第六講　科学論・翻訳論・異文化理解論〈記述問題〉

玄白(注1)は、『解体新書』の翻訳について、その書の凡例で興味深いことを述べている。大雑把な現代語訳では次のようになる。

訳には三種類ある。一つは翻訳であり、もう一つは義訳であり、最後は直訳である。例えばオランダ語で「ベンデレン」は日本語の「骨」に相当する。このときそれを「骨」と訳す。これが翻訳である。またオランダ語に「カラカベン」というのがある。この語の意味は「軟い骨」ということである。そこで訳して「軟骨」とする。これが義訳である。またオランダ語に「キリイル」というのがある。これは日本語に相当する語はなく、また意味を取って解釈することもできない。そこでこの場合は「キリイル」とそのまま書く。これが直訳である。

Aこのような基準に基づいて玄白は、翻訳を行ったと考えられる。さて『解体新書』を調べて面白いことに気付く。ある意味では当然ながら、眼、口、鼻、耳など、日常的に使われる語で、しかもその指示対象がほとんど一義的にはっきりしているもの、言い換えれば、ある医学の理論の持つ独特の制御力には関わらないような語に関しては、すべてが彼の言う第一の「翻訳」で済まされている。当然であろう。もちろん、われわれが日本語で「口」というときと全く同じ対象をオランダ語の口に相当する語が指示しているかどうか、正確に調べれば、ずれが見付かる可能性はあるだろう。しかし、そのずれは小さいと見てよい。他方、玄白は問題ないと感じたらしいが、そうしたものの中にも、やや困難が生じる可能性のあるものもある。例えば、「欠盆」や「人中」という日本語（本来は漢語であろうが）が無造作に当てられている「翻訳」は、今のわれわれから見ると、奇異に感じられる（前者は「鎖骨」、後者は鼻下の縦の溝のこと）。その理由は、恐らく訳語のどちらもがかなり漢方の理論体系を背負った語であり、西欧の概念であるはずの、それらに相当する原語が、漢方的な意味を伴って理解されてしまうことに、無意識の抵抗が生まれるのが、その奇異な感じの原因であろう。言い換えれば、「欠盆」や「人中」と訳すことは、本来そうではない概念を、漢方の体系の持つ制御力の範囲のなかに取り込んでしまうこと、もう一度言い換えれば、自分が蒙（こうむ）っているものとは別の制御力を、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

自分の方に移し入れることなく、外来の文化を自分の文化の文脈のなかで理解してしまっていることになると思われる。ここには興味深い点があることに気付いておこう。それは、玄白は「欠盆」という語を特に注意しないで使っているが、われわれ現代の日本人にとっては、その訳語は自然には受け取れないという事実である。そのことについては、後にもう一度戻ってくる機会があるだろう。

さて、玄白は、しかしかなり多くの語を、彼の言う「義訳」と「直訳」に依拠している。これは何を意味するか。一例を「神経」にとろう。先に述べた「軟骨」と同じように、この語を彼は「義訳」によって造語している。しかし考えてみると、オランダ語の「神経」に相当する概念を日本語のなかに探せば、「経絡」というような語が直ちに思い付かれるはずではないか。しかし玄白はそうしなかった。わざわざ自分で「神経」と言う語を新しく（原語の意味を取りながら）造ったのである。彼はなぜそうしたのか。

言うまでもなく、玄白は、「神経」に当たる原語を、「経絡」に置き換える「危険」を知っていたのだと思う。「神経」という概念は、西欧の医学理論全体の制御力に縛られた概念であり、他方、「経絡」は完全に漢方の理論の持つ制御力に縛られた概念である。もしそれを「経絡」で置き換えたときには、西欧の医学理論を漢方の制御力の範囲のなかで理解してしまうことに繋がるのであり、それは本当の「翻訳」にはならない、と玄白は考えていたからに違いない。事実こうして彼は数多くの「新造語」をこの翻訳に際して導入せざるを得なかったのであった。

（中略）

そしてこのような配慮は、日本人が西欧の様々な学問体系を移入するに当たって、極めて神経質に注意してきたことであった。それは西欧の学問の移入・翻訳に際して、「哲学」、「科学」、「社会」、「自由」などをはじめ、非常に多くの術語的概念を、既存の漢語や和語によってではなく、新造語によって置き換えてきたことのなかによく表わされている。

新造語に頼ることの（翻訳における）利点は、すでに述べたことのなかに尽きるが、結局、それが、翻訳する側のなかにある既存の枠組みの制御力からかなりな程度自由な語が得られるからであり、翻訳される側の制御力と、既存のものとの間の違いを認識させるのにそれが役に立つからである。（中略）

したがって、翻訳の理想は、翻訳する側の既存の制御力にできる限り依拠しない、新しい（翻訳される側の）制御力を移し入

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

れることにある、と言えよう。

（中略）

翻訳が大々的に行われたバグダッド、トレド、フィレンツェ、江戸で、新しい創造的な体系の構築がしばしば見られたのは、やはり偶然ではない。自分のアニマ(注2)と、帰属する共同体の制御力との揺動的な平衡が比較的安定しているとき、人は制御力の存在に気付かない。別の制御力に出逢ったときに初めて、自分のアニマがある特定の型に塑形されており、それとは違った塑形のされ方もあり得るのだ、ということに気付くのである。通常カルチャー・ショックと言われるのは、このことであろう。カルチャー・ショックとは、自分の属する文化とは異なる、「別」の文化の制御力があることに気付くことではない。むしろ自分がある特定の制御力の影響下にあって、ある特定の平衡点に安定していたことを発見することにあるのではないか。

話を戻すと、真の翻訳とは、そのようなカルチャー・ショックを与えるような作用力を持ったものということになる。そして当然のことながら、このようなカルチャー・ショックは、何も、外国の文化に接した（そしてそれが本質的な意味で翻訳された）ときだけに起こるのではない。個人レヴェルで考えれば、そうしたショックは、同じ文化のなかにある、別の下位共同体の持つ制御力に出逢ったときにも、当然起こり得る。言い換えれば、人間は、誇張して言えば、日々新しく再生されていることになろう。

（村上陽一郎「文明の死　文化の再生」による）

注１　玄白――杉田玄白（江戸時代の蘭医。一七三三～一八一七）。

注２　アニマ――生命や思考の原理、精神。ここでは、筆者は個人の根元的な内部にある「生のエネルギー」と考え、共同体の「制御力」に対置する。

問１　傍線部Aの「このような基準」について、玄白の訳の「基準」とはどのようなことか。「翻訳」「義訳」「直訳」についてそれぞれ二十五字以内（句読点を含む）でまとめよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問２　本文の内容に合致しないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

① 日本人は、西欧の学問を取り入れる際、その学問に関する語が既存の日本語文化の文脈で理解されてしまうことがないように、多くの新しい語を作り上げた。

② 「神経」という語は、漢方の枠組みに左右されないように作り出された語であって、さらには西洋医学の論理の中での概念として理解されるようになっている。

③ 眼、口、鼻などの日常語であって、かつ、指示するものが明確な語は、その語を含み込む言語系の持つ枠組みから比較的自由であり、翻訳では問題にならないと考えてよい。

④ 翻訳とは、翻訳される側の単語を翻訳する側の単語に置き換えることだけではなく、両者の文化の枠組みのなかで共通な価値を持つ語を探し当てることでもある。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　村上陽一郎＝むらかみ　よういちろう（一九三六〜）東京大学教養学部卒、東大教授、ＩＣＵ教授などを経て、東洋英和女学院大学学長。科学史科学哲学の泰斗（たいと）（その道の大家として尊敬されているということだよ）。著書『西欧近代科学』『近代科学を超えて』『科学者とは何か』など

語句

平衡＝へいこう→釣り合いが取れて安定、バランスが取れていること。本文中では「揺動的な平衡」とありますが、生物や社会は動き変動しながらある程度安定した状態を作り出しています（生物以外でも独楽（こま）や自転車は動くことで安定する）。私たち生き物は、日々ご飯を食べ、吸収し、排出し、分子レベルでは入れ替わりながら、今ある状態を作っている。社会も生まれる人、死にゆく人の出入りがありつつ、今ある状態を維持している。こうした維持は固定的ではなく、動きながら、あるいは動くことでバランスや安定を維持しています。英語でダイナミック・イクイリブリウム。ただし、そうしてある程度安定しているとき、自分が何によって安定しているのかとか、自分の特異性とかには気づかない。当たり前さに安住する。異質なものとの出会いによって、はじめて異質な他者を知ると同時に、自分自身の特異性にも自覚的になる。当たり前だと思っていたことが、当たり前ではなかったと。これがカルチャー・ショックなんです。　類義語　均衡

塑形＝そけい→かたちづくること

術語＝じゅつご→テクニカルターム・特別な専門用語・重要キーワード。「主語・述語」の「述語」と違うからね。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）外国から見るとキ異な習慣もある　①期　②機　③軌　④貴　⑤奇

（イ）西欧文化圏のセイ御力の効いた言葉だ　①征　②精　③制　④盛　⑤勢

（ウ）次の試験の出題ハン囲をしぼる　①班　②範　③版　④汎　⑤藩

（エ）幸運なグウ然に助けられたよ　①遇　②寓　③偶　④隅　⑤宮

（オ）他者へのハイ慮を欠かさないように　①廃　②排　③配　④拝　⑤輩

（カ）故郷の村へのキ属意識が強い　①基　②気　③貴　④着　⑤帰

（キ）バランスのとれた平コウ状態　①公　②効　③考　④抗　⑤衡

（ク）外の文物を国内に大量イ入する　①威　②居　③偉　④移　⑤易

（ケ）漢方の理論にイ拠した処方をする　①医　②依　③射　④威　⑤伊

（コ）さしせまった重大な危ケンを回避　①顕　②険　③剣　④顕　⑤検

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　科学論・翻訳論・異文化理解論

《本文の対比構造》

主役

「義訳」＝ヨーロッパ語の原語の意味を取って新たに造語する
自己の属する文化圏と翻訳相手の文化圏との違いを意識させるもの
……筆者が言う本当の翻訳

対比

比較相手1

「翻訳」＝ヨーロッパ語の原語の概念に相当する日本語を当てはめる
杉田玄白の言うところの「翻訳」

対比

比較相手2

「直訳」＝ヨーロッパ語の原語をそのまま使う

対比

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《キーワード説明・記述》

「このような基準」とは、どのような場合にどんな「訳」をするのかということです。したがって答案の中身は、「翻訳」「義訳」「直訳」のそれぞれの説明ということです。もちろん、使えることばの素材は本文中にあります。傍線部直前の、玄白の現代語訳の中にも素材があります。さらに、後半「神経」の例を出しているあたりにも「翻訳」「義訳」の説明があります。さて、解答を作る際には、**〝具体例はカット〟〝対比を表現する〟〝繰り返されている表現は大事〟**という記述答案の三大原則がよくあてはまります。またそういうことができるようになるための練習課題です。つまり「ベンデレン」「骨」「カラカベン」「軟骨」「キリイル」「神経」「経絡」などという具体例ではなく、まとまった表現として繰り返し出てくる語が、重要キーワードとなるわけです。では「翻訳」の説明として得点になるポイント箇所を言います。「ヨーロッパ語」「原語」「外国語」などの表現が第一ポイント。次いでそれらに「相当する日本語」「当たる日本語」のうち「相当する」「当たる」が第二ポイント。「日本語」「語」が第三ポイントです。さらにそうした日本語に「置き換える」「当てはめる」「適用する」などの表現が第四ポイントです。四つのうち二つくらい押さえられたら受験生の答案としてはＯＫです。では、「義訳」のポイントを挙げます。「翻訳で済まさない」「翻訳せず」が第一ポイントです。対比を入れます。日本語に相当する単語があるのにそれを使わないということです。せっかく外の世界（ヨーロッパ）のものの考え方を導入しようとして訳をしているのに、もともとある言葉で済ますと誤解を生じる、違いがわからなくなることを、杉田玄白は警戒したわけです。こういう対比を入れられるようになると、得点力がありありと増強されます。次に、「原語の意味を取る」「原語の意味を取って解釈する」のうち「原語」（ヨーロッパ語・外国語）が第二ポイントで、「意味を取る」「意味を取って解釈する」が第三ポイントです。さらに「新たに」が第四ポイントで、「造語する」「つくる」が第五ポイントです。「新造語」なら第四と第五をまとめて得点します。以上、合計五つポイントがありました。三つ取れたら上出来です。最後は、「直訳」のポイント箇所です。「翻訳できない」「相当する日本語がない」などが第一ポイントです。次に「義訳できない」「造語できない」「意味を取ることができない」などが第二ポイントです。つまり、ここでも対比が入ります。次いで、「原語をそのまま使う」となりますが、細かく「原語を」「外国語を」「ヨーロッパ語を」が第三ポイントで、「そのまま」が第四ポイントです。こちらも二つは取りたい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問２《全体の主旨》

間違い探しです。④にご注目ください。「翻訳される側（例えば西欧）」と「翻訳する側（日本）」、「両者の～共通な価値」とありますが、この「共通」が×です。「違いを認識」することこそが大切で、そのことを意識させるのが「翻訳の理想」「本質的な意味で」の翻訳です。〝杉田玄白版の「翻訳」〟なら日本語との「共通」点重視でしょうが、この全文の内容に関わる問い、つまり筆者の見解として重要視されている翻訳、〝筆者版翻訳〟の説明をしなくちゃなりません。というわけで対比混乱の誤りと呼んでも記述に反する誤りと呼んでもＯＫです。その他は本文の内容に合致しています。

模範解答

問１　翻訳＝原語の概念に相当する日本語に置き換えること。
　　　義訳＝翻訳で済まさず原語の意味を取り新たに造語すること。
　　　直訳＝翻訳も義訳もできないため原語をそのまま使うこと。

問２＝④

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第六講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）③　（オ）③
（カ）⑤　（キ）⑤　（ク）④　（ケ）②　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）奇異　（イ）制御　（ウ）範囲　（エ）偶然　（オ）配慮
（カ）帰属　（キ）平衡　（ク）移入　（ケ）依拠　（コ）危険

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。